

平成27年度全国学力・学習状況調査を踏まえた 分析と改善方策について

印南町立稲原中学校

1 調査の概要

(1) 調査日 平成27年4月21日(火)

(2) 調査の目的

◇義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。

◇児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。

◇教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

(3) 調査内容

調査の対象 中学校第3学年 12名

教科に関する調査 国語、数学、理科

└ 主として知識に関する問題(A)

└ 主として活用に関する問題(B)

生活習慣や学習環境等に関する質問紙調査

└ 生徒質問紙調査 ----- 学習意欲、学習方法、学習環境、
生活の諸側面等

└ 学校質問紙調査 ----- 指導方法に関する取組や人的・物的な
教育条件の整備の状況等

2 教科に関する調査結果の概要

国 語

- 品詞の識別や、一部の漢字の読み書きに課題が見られる。
- 問題形式別に見てみると、選択式、短答式、記述式については概ね良好であるが、一部の記述問題で課題が見られる。

(1) 国語A (知識)

- ◇登場人物の言動の意味を考え、内容を理解することはすべての生徒ができている。
[A3]ー 100.0%
- ◇文章から適切な情報を得て、考えをまとめることはすべての生徒ができている。
[A5]ー 100.0%
- ◇漢字を書く（地図のシュクシャクを調べる）はすべての生徒ができている。[A9]ー（力）100.0%
- ◆「青い」と「青さ」の品詞を類別することに課題がある。[A9]四㊟ 0.0%
- ◆文脈をとらえ適切な語句を選択することに課題がある。[A9]三エ 50.0%

(2) 国語B (活用)

- ◇状況に応じて、資料を活用して話すことは多くの生徒ができている。[B1]ー 91.7%
- ◇表現の工夫について自分の考えをもつことはすべての生徒ができている。[B3]二 100.0%
- ◆ 資料の提示の仕方を工夫し、その理由を具体的に書くことについては課題がある
[B1]三 50.0%
- ◆ 目的に応じて文章を要約することについては課題がある。[B2]ー 75.0%

平均正答率（％）

学習指導要領の領域等	国語（A）	国語（B）
話すこと・聞くこと	87.5	77.8
書くこと	80.0	44.4
読むこと	93.3	72.2
伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項	75.0	—

全国平均に比べて5ポイント以上 上回る（青字）・下回る（赤字）

数 学

- 数と式の領域は概ね良好であるが、図形の領域に課題がある。
- 数学 B において、問題形式ごとの正答率を見ると、短答式や記述式は全国を上回っているが、選択式は 5 ポイント以上下回っている。

(1) 数学 A (知識)

- ◇ $12 : 9$ と等しい比を選ぶのは、すべての生徒ができています。[A 1](1) 100.0 %]
- ◇ $12 - 2 \times (-6)$ をすべての生徒が計算できている。[A 1](2) 100.0 %]
- ◇ $5x - x$ をすべての生徒が計算できている。[A 2](1) 100.0 %]
- ◆数量の関係を文字式に表すことに課題がある。[A 2](2) 16.7 %]
- ◆証明の必要性和意味の理解に課題がある。[A 8](2) 25.0 %]

(2) 数学 B (活用)

- ◇問題場面における考察の対象を明確に捉えることができています。[B 2](1) 91.7 %]
- ◇発展的に考え、予想した事柄を説明することができています。[B 2](3) 83.3 %]
- ◆事象を式の意味に即して解釈し、その結果を数学的な表現を用いて説明することに課題がある。[B 1](3) 16.7 %]
- ◆平面図形と空間図形を関連付けて事象を考察し、その特徴を的確に捉えることに課題がある。[B 3](1) 16.7 %]

平均正答率 (%)

学習指導要領の領域等	数学 (A)	数学 (B)
数と式	79.2	77.1
図形	70.1	33.3
関数	75.0	35.0
資料の活用	72.9	45.8

全国平均に比べて 5 ポイント以上 上回る (青字)・下回る (赤字)

理 科

- 短答式の問題で用語等を答える問題は全ての領域で全国平均を上回った。
- 知識・理解や観察・実験の観点で答える問題については正答率が高いが、科学的思考を問われる問題に個人差が見られる。

(1) 理科A (知識)

- ◇天気図から風力を読み取る問題はほとんどの生徒ができています。[2](1)91.7 %]
- ◇消化酵素によってデンプンが最終的に分解された物質の名称を選ぶ問題はほとんどの生徒ができています [7](1)91.7 %]
- ◆天気図から風向を読み取り、その風向を示している風向計を選ぶ問題に課題が見られる 258.3 %]

(2) 理科B (活用)

- ◇技術の仕組みを示す場面において、スイッチの入り切りによる時間の変化を説明する問題はほとんどの生徒ができています。[5](2)91.7 %]
- ◇キウイフルーツがゼラチンや寒天を分解する働きを説明した記述として適切なものを選ぶ問題はほとんどの生徒ができています [7](2)83.3 %]
- ◆溶解度の知識と溶け残りのようすを関係づけて分析して解釈することに課題がある。[1](2)16.7 %]
- ◆基礎的・基本的な知識・技能を活用しグラフ・試料などに基づいて、自らの考えや他者の考えを検討して改善することに課題がある。[2](3)16.7 %]

平均正答率 (%)

学習指導要領の分野・領域		理科
1 分野	物理的領域	58.3
	化学的領域	63.1
2 分野	生物的領域	70.8
	地学的領域	50.0

全国平均に比べて5ポイント以上 上回る (青字)・下回る (赤字)

3 質問紙調査の結果の概要

(1) 勉強が「好き」「どちらかといえば、好き」と思う生徒の割合は、数学・理科ともに全国や県を上回っている。

	国語	数学	理科
学校	41.7	75.0	66.7
県	49.9	54.0	57.9
全国	60.5	56.0	61.9

(2) 授業の内容が「よくわかる」「どちらかといえば、よくわかる」と思う生徒の割合は、数学・理科ともに全国や県を上回っている。

	国語	数学	理科
学校	66.7	100	91.7
県	70.2	72.8	67.0
全国	74.3	71.6	66.8

(3) 授業時間以外に全く勉強しない生徒の割合は、平日・休日ともに0である。しかし、1時間以上勉強をしている生徒の割合は、県・全国と比較して小さく、学習時間の短い生徒が多い。

	平日	休日
学校	50.0	50.0
県	67.2	55.8
全国	69.0	68.7

(4) 国語の授業で意見などを発表するとき、うまく伝わるように話の組み立てを「工夫している」「どちらかといえば、工夫している」生徒の割合は、全国・県より小さい。

学校	33.3
県	43.7
全国	54.0

(5) 「家の人と学校での出来事について話をしますか」について、「している」と回答した生徒の割合は全国・県を下回っている。

学校	41.7
県	43.8
全国	43.6

(6) 今住んでいる地域の行事に「参加している」「どちらかといえば参加している」と答えた生徒の割合は、全国や県を上回っている。

学校	75.0
県	39.7
全国	44.8

(7) 家の人は、授業参観や運動会などの学校行事にきますかの質問に対して「よく来る」「時々来る」と答えた生徒の割合は、全国や県を上回っており、保護者の学校に対する協力と教育に対する関心が高い。

学校	100.0
県	73.2
全国	83.4

(8) 1、2年のときに受けた授業の最後に、学習内容を振り返る活動をよく行っていたと思いますかの質問に対して「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と答えた生徒の割合は、全国や県を上回っている。

学校	75.0
県	53.1
全国	59.3

(9) 総合的な学習の時間の授業で学習したことは、普段の生活や社会に出たときに役に立つと思いますかの質問に対して「当てはまる」「どちらかと言えば当てはまる」と答えた生徒の割合は、全国や県を上回っている。

学校	100.0
県	74.6
全国	74.6

(10) 自分の将来の夢や目標を持っていますかの質問に対して「当てはまる」「どちらかと言えば当てはまる」と答えた生徒の割合は、全国や県を上回っている。

学校	83.3
県	70.2
全国	71.7

4 調査結果を踏まえた改善方策

本校では、「基礎・基本の学力の定着と個々の学力の向上を図る」「自他を大切に、集団としての質の向上をはかる」ことを研究テーマのひとつに設定して取り組んでいる。

学力向上の具体的な方策として、各教科において「和歌山の授業づくりの基礎・基本3か条」を基にした授業改善を図ってきている。また、校内授業研究会を積極的に取り入れ、研究協議ではKJ法を用いて、より授業の質の向上を図ると共に、弾力的なTT指導を導入して個に応じた学習支援を行うことを大切にしている。

その他、各教科で定期的にノート提出をさせ、学力定着の重要な要素であるノートのよりよい取り方を指導している。朝学活時の読書・基礎学タイムや終学活時の基礎学タイムを設けたり、始業前や放課後、長期の休業中を活用した補充学習を行ったりすることにより、基礎・基本的な学力の定着を目指している。一昨年度からは「家庭学習の手引き」を作成し、予習や復習を充実させるための家庭学習の指導を行ってきた。

また、学習は、学級という学習集団の状態が学習意欲や学習活動に多大な影響を与えるとことから、生徒間に一定のルールと良好な人間関係が確立していれば学習の定着率が高いことは知られている。そこで、よりよい学習集団を作っていくために、年2回のハイパーQU等を活用することにより、常に生徒集団の状況を把握したり、振り返らせたりしながら集団としての質の向上を目指していきたいと考える。2学期からは、授業規律について見直しを図りながら取り組んでいる。しかしながら、まだまだ、全生徒にこれらの成果が確認されていないこともあり、引き続いて先に挙げた具体的な取り組みを充実させると共に、個に応じたきめ細かな学習支援を教職員全体で、また、一人一人が考えながら取り組んでいきたいと考える。

以下、国語科、数学科及び理科における具体的な方策を記述することとする。

(国語)

全体的な結果を見てみると、正答率はそれぞれ国語 A・国語 Bとも県や全国を上回る結果であった。しかし、領域ごとに見てみると、語句や文法といった知識に関する分野に課題が見られた。特に、**9**四 単語の識別の正答率は低い結果となった。

文法の復習を定期的に行い、理解を深めるとともに、家庭学習や小テスト等で復習を行いながら、知識の定着を図りたい。

また、**2**三「複数の資料から適切な情報を得て、自分の考えを具体的に書く」とい

う設問に課題が見られた。複数の資料の内容をまとめられていても、自分の考えを具体的に書けたものが少なかった。20年後の社会の中でどのように関わるかという意見を書くには、積極的な将来への意識、主体的思考が必要であり、社会のできごとに対して意見文を書くといった活動を継続的に行っていきたい。生徒質問紙からは指導法の工夫や理解、興味関心の向上といった課題も見受けられた。わかりやすい授業づくりにつとめていきたい。

（数学）

全体的な結果を見てみると、正答率はそれぞれ数学 A・数学 B とも県や全国を上回る結果であった。しかし、学習指導要領の領域ごとに考察すると、図形分野や関数分野に課題が見られた。特に数学 B における図形分野における正答率が低く、必要な情報を選択し的確に処理する能力や式から数学的な表現を用いて説明する力を今後の授業で付けていかなければならない。「自分の言葉で表現する」や「数学的な表現を用いて説明する」ことに対して苦手意識があるため、生徒から出た意見をできるだけ取り上げ、認めてやることで、まずは「書く」ということへの抵抗をなくしていきたい。また生徒同士の意見交流の機会を多く設定し、様々な意見や説明の仕方があることも学ばせたい。

生徒質問紙で、すべての生徒が「数学が出来るようになりたいと思う」と答えている。数学が苦手という生徒もやはり出来るようになりたいと思っているのだと改めて感じた。生徒の気持ちを大切に、「出来た」「解けた」という実感を多くさせられるような授業を展開させていきたい。

（理科）

短答式の問題で用語等を答える問題は全ての領域で全国平均を上回った。

知識・理解や観察・実験の観点で答える問題については正答率が高いが、科学的思考を問われる問題に個人差が見られる。また全体的に問題文から問われていることは何かを正確に把握することや、必要な情報を選択し解を求めるということに課題がある。

まず、観察・実験の結果やデータを処理し分析して解釈できるように指導したい。結果を比較したりするのに図を用いたりして視覚的に訴えたり、複数のグラフの特徴を比較したりするなどの学習場面を設定したい。そのため多面的、総合的に思考できるように様々な観察・実験等を行っていきたい。また、提示する自然の事物・現象と学習して得た知識との差異に気づかせ、自ら予想や仮説を設定し、検証する実験を計画できるようにしていきたい。